

# 私の戦争

園田 壽子

中野一丁目

私が現住地へ移転して来たのは昭和十一年五月でした。すぐにテニスコートが二面あり、青梅街道と平行に二本の川が流れていて、宝仙寺の森があり、のどかで桜の美しい土地でした。

新宿へは省線で二駅か、青梅街道のバスか小さい都電を使いました。十二年に中国と、十六年十二月に米國と戦争が始まりました。最初は千人針を作って送ったり、慰問袋に心をこめた日用品や人形を手作りして入れ、もちろん励ましの手紙をそえました。そのうち隣組からも出征する方があり、食物も不足するようになり、テニスコートは畑になり、ナスやキュウリを植えたり、さつまいもも作りました。

女学校を卒業して上の学校へ進学する時は大変でした。現在では考えられません、どんな勉強をしたいかということより、国の要求している技術を身につける、結婚相手が出征して戦死しても一人立ちして生きていける人間になることが要求されたのです。大好きな国文科へ進むことをあきらめて、日本女子大家政二類（理科系）に進学して一年半は勉強がやれましたが、

二年の十二月には、神宮競技場で行われた学徒出陣の男子学生を見送りました。主に法文系大学生でしたが、列の最後尾に高等学校生が何名かうなだれて歩いてた姿が忘れられません。

続いて学徒動員が十九年に行われて、中学校以上の生徒はすべて工場に配置されて働きました。私たちは海軍技術研究所の委託生ということで、研究所や電波関係の仕事につきました。その間に妹が通っていた中島飛行機の工場が空襲にあたり、井の頭公園の池の傍で艦載機の銃撃を受けて地面に伏せてやりすごしたこともありました。大雪が降って省線がとまり、吉祥寺の日本無線から井の頭公園、青梅街道を通り、家まで歩いて帰ったこともありです。服装はすべて紺か黒のかすりやサージの長袖のモンペでした。洗剤がなくて洗えないので汚れが目立たず幸いでした。防空頭巾はいつも身につけていました。二〇年三月十日の下町大空襲は忘れられません。東中野の駅の所からは今のように高い建物がないので、よく見えたのです。広い地区の周囲に焼夷弾を落とし、重油をまいて、火の海として市民

全員の焼殺をはかったのです。四月、五月と焼土はますます広くなり、新宿へ行く省線に乗ると、一面の焼け野原となった線路の北側に三越と伊勢丹の固りがあり、大きい木の焼け残ったもの、煙突や電柱の焼け残り、昔のトイレの回りをかこつた大谷石とかめが方々に残っていました。水道のカランから水が出ていたり、我が家では、大百科辞典や大言海などの大きい書物が残って、風が吹く度にハラハラと頁をひるがえしながら、何日も燃えていたそうです。象牙で出来たマージャンパイは、形と凶柄がそのまま残っていて、踏んだらサラサラとくずれてしまったそうです。ヒスイの帯止めは無キズのまま出土して母を喜ばせたそうです。五月二五日に線路の南側に焼夷弾がまかれ一面の火の海となり、着のみ着のまま逃げる途中で、町会の役員が乾パンや非常食を箱ごとかついで行くのに出合ったそうです。母はヤカンに水をいれて、皆のズキンや衣服に火の粉が落ちて燃えるのを消しながら、先に焼けた線路の北側に逃げて助かったそうです。

私は二〇年四月二九日に、主人が戦友の遺骨を届けに来たのについて、満州（中国東北部）の奉天に行きました。どこにいても死ぬことになるのなら愛する人と一緒にいたいと思ったのです。東京駅から下関までに三回空襲に会って、列車の外に逃げて様子を見ました。関釜連絡船に乗って夜の海をわたり、大きな船をゆるがす波の激しさに生きた心地もなくふるえていま

した。朝鮮からは広軌の列車でゆったりした車内の様子、食物が自由に手に入る様子に驚きました。でも内地の人は細菌に対する抵抗力がないから、生水、生物は一切口に入れないように言われて驚きました。列車に乗って行けども行けども広い広い大地で、山や川、大木などとは見当たらず、異郷に来たという思いを深くしました。黄土と緑の少ないことが印象に残っています。奉天に着いたのは五月七日と記憶しています。東京を出て八日たっていました。八月に入ってソ連軍が侵攻し、町はすっかり変わりました。奉天市干洪区干洪街二段航空学校官舎は全体でまとまり、市内へ行く時は何人かのグループで単独行動は取らない。食料は日をきめて特定の商人から買う。ソ連人、ソ連軍人が来たら全体で交渉することなどが決められました。何組かのソ連軍人達が来て軍人の持つ武器・軍刀・ピストルなどを集めて行き、その他では腕時計をほしがりました。ノックをするので戸をあけると手をつかみ、時計を探します。自分の腕に何個もまきつけて、不器用なのですぐゼンマイをまき切ってしまうのです。でもすぐに他へ移動して、中国の兵士が来たり二一年五月まで、国家からも軍からも見捨てられて、自分達で身を守り収入を得なければなりません。幸いミシンがありましたので、男物の和服の裏地で満州服を作ったり、軍人のマントや服を改造してジャンパーやズボンに直したりしてお金

をかせぎました。学校の灰捨場から無煙炭やコークスを集めて砕き、黄土とまぜて練ってタドンを山のように作り、家でも使っている男の人に市内に売りに行ってもらいました。奉天の冬は寒くて、燃料がないと凍死してしまいます。日本の人に安く売って、コタツの中で使うとオンドルやペチカのように大量の燃料を使わなくてすむので助かったと言われました。十二月末にはお餅をついて、お正月のお祝いもすることが出来たのです。その内だんだんお腹も大きくなり、仕事もつらくなって来ました。市内では若い男の人が集められてソ連に連行されたということですから。家族のない人や元気な若い人は、夜中にこっそり海に近い都市へ逃げて行きました。引き揚げの話がそこで聞こえてきます。新京や奥地から大勢の人が奉天に入って待機しているとのこと。五月に入ってから列車がコロ島向けで出発している。コロ島からは日本に船で帰れるとの話が伝わってきて、私達も準備を始めました。ところが、十五日の予定日をすぎても赤ちゃんが産まれないのです。今日か明日かと待っているうち、ようやく二五日に産気づき、官舎の中で軍医さんと産婆さんの経験のある奥様に立ち会っていただきました。初産は時間がかかるとの言葉どおりで、朝入浴して久しぶりに髪まで洗って待ちましたのに、赤ちゃんは夕方になってようやく生まれました。何べんも東京にいる母のことを思い、苦しさに泣く思いを致しました。軍医さんに大きな声で励まされ、泣く思い

で何度も何度も力をこめた末に、大きな男の赤ちゃんが生まれました。力のある声でオギャーオギャーと泣くのでとても嬉しく思いました。持って来た少ない衣類をとても用意しておしめでは心細く、官舎の方から古い浴衣をいただいたりしました。リュックは帯の芯を取り出して作り、赤ちゃんの産着と私の夏の二着ずつの他は、すべて売ったり残して来ました。少しばかりの食物を入れ、残りはおしめを入れて、もう一包みもおしめを入れました。他にアルマイトのヤカンと洗面器を持つようになりました。

引き揚げは六月四日と決まりました。どんな思いでその日を待ったことでしょうか。ところが出発が一日延期されて、その午後に隣家の主人に案内された中央軍兵士という人が夫を連れてゆき、夫はそのまま帰宅しなかったのです。「園田君いるんだね」と声をかけてから兵士を案内した人を本当に恨みました。生後十一日の赤子を抱いて、一晚中眠らずに帰宅を待ちました。五日の出発、コロ島までの一か月の苦しい旅、乗船最後のギリギリまで待ちましたが、夫は帰って来ませんでした。官舎を出発する時、夫のリュックと胴まき（私はおしめを持ち、夫は全財産を）をこつつけた後輩の人からも、以来、何の連絡もありません。厚生省引揚援護局の方へも届け出て、新聞のたずね人にも出し、中国赤十字のえらい方が見えた時も書面を出して探してもらったように依頼しました。それ以来全く消息は分からな

いままなのです。生まれた時にあごが小さいのを見て「おれに似てるよ」と笑って、嬉しそうに頭をなでてもらった息子千秋も四七歳になりました。

我に似しと笑みてゆきたる父の顔

おぼえぬ吾子も四十五となる

結ばれて共にせし時短かければ

桜花かげ夫と歩まず

こんな思いは常にあり、どなたか「エライサン」が「もはや戦後ではない」なんて言われましたが、とんでもありません。私の戦争はまだ終わっていないのです。戦後四十数年で、ようやくこのごろ個人的に南方洋上の小さな島やロシア、シベリアで遺骨を集める作業が行われるようになりました。遺骨とまでは言いません。せめて誰それは、どこで、いつ、死亡したかぐらひは国家として責任を持って知らせて下さってもよろしいのではありませんか。

私は現住地を昔のままの状態に残していこうと思っています。父母が死亡し、兄弟とで分割してお借りしています。庭や家は戦災で焼けてしまいましたが、戦後すぐ建てた二間はずっとそのままの形にしてあります。

夫の消息を知りたい。その願いが叶えられるまで私の戦争は終わらないのです。どうかこの願いが叶えられますように祈ってやみません。

